「陸前高田の現状と課題、そして希望ある未来へ」（特別講演採録）

岩手県陸前高田市長　戸羽　太

宮﨑　ただいまから、戸羽太陸前高田市長に特別講演をしていただきます。最初に戸羽市長のプロフィールを紹介させていただきます。東京都立町田高等学校卒業。陸前高田市議会議員、陸前高田市副市長を経て、2011 年2月より現職であられます。かねてから学生部主催の林業体験を通じた陸前高田市と立教大学との交流をずっと見守ってくださっていましたが、今回、この東日本大震災にあたって本学からボランティアを派遣させていただくことを温かく受け入れ、学生たちにたくさんのメッセージをくださっております。あらためてお礼を申し上げつつ、本日ここにお招きできたことを心から喜しく感じております。ご多忙の中、お時間を割いていただきまして、ありがとうございます。

それでは戸羽市長、どうぞよろしくお願いいたします。

戸羽　皆様、こんにちは。岩手県陸前高田市長の戸羽太でございます。本日は立教大学のボランティアセンター設立 10 周年、まことにおめでとうございます。このような記念すべき行事にお招きをいただきまして、本当にありがとうございます。

それ以上に感謝を申し上げなければいけないのは、立教大学の関係者の皆様方には、東日本大震災で大打撃を受けました私ども陸前高田市に対しまして、震災直後から温かいご支援を賜っております。ご支援というよりも、寄り添っていただいているというほうが正確でしょう。私どもを支えるのは、まさにその「寄り添い」でございます。国があり、県があり、そして仲間の市町村もあるわけですけれども、私たちが一番求めているものは、やはり孤立したくない、放っておかれたくない、忘れられたくないということなのです。誰かが私たちのことを思い、心配してくださっている。その気持ちが、私たちを本当の意味で支えてくれています。先ほど吉岡総長からもお話がありましたとおり、陸前高田市と立教大学の絆というものは、協定も結んでいただき、さまざまな形でより強固なものになっていると考えています。この場をお借りして感謝を申し上げます。

震災から、既に 1000 日以上がたちました。皆様方の頭の中から、どんどん、この東日本大震災の記憶がなくなりつつあることは間違いないでしょう。多分、きょうここにお集まりの方々は、被災をした地域のことをご心配くださっていると思います。人の性（さが）と申しますか、仕方のないことではありますが、1000 日、2年9カ月もたつと、本当に過去の話になってしまうのです。では、現在、被災地はどうなっているか。やっといろいろな工事が始まりました。でも、まだ始まったばかりです。日本の技術をもってして、あるいは財政面を含め、世界における日本という国の地位から見ても、世界中の記者の方々からは、「なぜ2年9カ月もたっているのに、こんな状態なんでしょうか」とよく言われる状況でございます。全体の復興が100だとすれば、今は何とか1割近く、いろいろなことが動き出したに過ぎません。まだまだこれから先は長いなというのが現実です。

陸前高田市はもともと人口 24,000 人くらいの、本当に小さな小さな市でございます。その小さなまちを、2011 年3月 11 日、大きな大きな津波が襲い、市街地は一瞬にして流されて、すべてが消え去りました。市役所もなくなり、体育館など人が集まれるようなところすら一切なくなってしまったのです。駅も、商店街も流されました。当時は水1本買うところさえありませんでした。もちろん県外から救援に駆けつけて来てくれた人たちが寝泊りをするような場所もなかった。この点はいまだあまり変わっていません。お店はできてきましたが、宿泊施設などは依然として整備が遅れています。ですから、せっかくボランティアに来ていただいた方々も、あるいは震災で残念ながらご家族を亡くされ、今は遠くに住

んでおられる方々が、3月11日には陸前高田に戻りたい、お墓参りに行きたいといっても、帰ってこられる場所もない。そういう状況がいまだに続いています。

陸前高田市はもともと無名の地方都市でした。誰も知らなかったような市が、今は全国区レベルの知名度を得ています。これはまさに東日本大震災で大打撃を受けたからにほかなりません。当市で発見されたご遺体は 1,556 体です。24,000 分の 1,556 そして今なお 215 名の方が行方不明であります。現在もその行方不明者を、月命日を中心に、ときには NPO の方々の力を借りて集中的に捜索しています。昨年1年間で発見されたのはお一人です。もうそれくらい、行方不明者の捜索は難しくなっている。これが現実です。でも、その 215 名の方の家族や恋人がどんな思いで帰りを待っておられるか。これも現実です。そこに思いを致せば、やはり人として放っておくわけにはいきません。ですから、今、改めて NPO の方々やボランティアに来た人たちにもお願いをして、一生懸命、捜索をしていただいています。

陸前高田市には、海と道路の間に古川沼という沼があります。現在、この古川沼を埋め立てて防潮堤をつくる工事が進められていますが、行方不明者の手がかりまで一緒に埋められてしまうかもしれないという危惧があります。そこでボランティアに来ていただいた人たちには、土をふるいにかけていただき、髪の毛は落ちていないか、爪はないか、骨はないか。いま一度、もう一度しっかりと捜索をしましょうということで協力をお願いしています。もちろん何か手がかりが見つかることを前提としてはいますが、それ以上に、家族を捜しておられる方々は、「この道路を通るたびに、俺の娘は、妻はこの沼にいるんじゃないかなと思ってしまうんです。だから、もう一度、徹底的に捜してもらって、少なくともここにはいないということが分かれば、少しは気持ちに区切りがつくんです」という話をよくされます。

本当に復興が進みません。どんどん、どんどん風化が進んで、皆様方の記憶から無くなっていく。国においてもそういう傾向が如実にあらわれてしまっており、非常に残念に思っています。衆議院にも参議院にも復興特別委員会があります。臨時国会が開かれて特定秘密保護案が強行採決されたようでありますが、その間に復興特別委員会はたったの一度しか開かれていません。一度というのは1日ですよ。どう考えても我々は納得がいきません。復興、復興と言いながらも、本当にその気があるのだろうか、被災地のことを心配しているのか。一方で 2020 年には東京でオリンピックが開催されることが決まり、我々はもうこのまま取り残されてしまうのではないだろうかという不安を日々感じています。

私はこの2年9カ月の間ずっと、政権が民主党時代、そして自公になってからも国とやり取りをしてきました。政権が変わろうが何をしようが、なぜ前に進まないかといえば、私どもと国とで気持ちが共有できていないからなのです。まさにここが一番の問題点です。相手の立場に立ってものを考えることができれば、当然、被災者が、被災地が何を求めているのか、何が課題で、どれを急いで解決すべきなのかということがおのずと分かるはずです。でも、残念ながら日本は、震災当時から、非常時という危機感を持たないままずっと来てしまいました。人の記憶というのは薄れていきますから、今やもう余計に非常時ではないということになっているのだろうと思います。

震災後、「千年に一度の未曽有の大震災」という言葉が盛んに使われました。そうは言いながらも、その千年に一度の被災をしている地域に対して、通常のルールで臨もうとした対応が、被災地の復興を遅らせてきたというのは、間違いのない事実であります。今、一番大きな課題になっているのは、土地の権利関係です。陸前高田市は市街地がなくなりました。例えば、今、この会場が陸前高田市の市街地だと仮定しましょう。皆さんが座っておられるところが、皆さんの住宅であり、土地も含め、財産です。それが3・11 の大津波でみんな流されてしまい、ただのだだっ広い野原になってしまった。皆さんは今、仮設住宅に住んでおられるかもしれないし、別なところに避難をされているかもしれません。

まちの再建に向け、私たちは高台を造成しなければなりません。高台を造成すると、残土がどんどん出てきます。では、その土をどこに置くか。素人考えで言えば、こんなに広い土地があるのだから、幾らでも置けるではないかと思うんですね。確かに今は誰も住んでいない土地でありますが、皆さんおひとりおひとりが地主であり、権利を持っていますよね。ですから、法律にのっとって手続きをしなければなりません。今、私たちが急務としているのは、土地の所有権を持つ方おひとりおひとりを訪ねて、「土地を使わせてください」、「土を置かせてください」、「かさ上げさせてください」とお願いに上がることです。皆さんが陸前高田市に住んでいて居場所が分かるのだったら、話は早いのです。一日も早くまちを再建してほしいというのが住民の皆様の感情ですから、協力はしていただける。

問題は、家族で被災をしてしまって、全員がお亡くなりになった世帯もあります。例えば私のうちの家族がみんな亡くなったとします。戸羽太という人間が持っていた土地がそこに残っている。役所はどうするかといえば、戸羽太という人間に兄弟姉妹はいないか調べます。どうやら兄がいるらしい。どこに住んでいるのか。東京の町田にいるらしい。では、住所を調べて行ってきてくれといって職員が出向くわけです。そして、「弟さんの土地を相続されると思いますが、復興のために使わせていただけないでしょうか」とお願いをする。現実には、もう日本中、それこそ海外にも陸前高田市の土地を持っている方がいます。ただでさえもマンパワーが足りない今、2千、3千人もの権利者から承認の印鑑をもらってこいというのが国の言い分です。おかしいではないですか。今、誰も住んでおらず、しかも使えない土地。収用するのではありませんよ。一時的に使わせてもらうだけです。それでさえも国はなかなか首を縦に振りません。法務省が何と言うか。法律改正するのは時間がかかるなど、できない理由を次から次に出してきます。そのわりに、どうすればいいかという対案が出てこない。本当に情けない話です。

ボランティアとは一体何でしょうか。日本はもともとあまりボランティア精神が育っている国ではなかったと思います。阪神淡路大震災や、この東日本大震災が起こる中で、だんだん醸成されてきたと言ってもいいでしょう。私が考えるボランティアとは、あの人たち困っているんだろうな、大変だろうな、だから何かお手伝いしたいなと自発的に動くということがベースにあります。この気持ちが一番大事ではないでしょうか。

以前、ボランティア関係の学会にパネラーで呼ばれたことがあります。同じパネラーには、NGOの代表の方、企業の方、政治家もいらっしゃいました。そこで並んで話をすると、皆さんビジネス感覚なんです。私は通常、東京に来るときは、田舎の貧乏な自治体ですから、グリーン車なんかには乗りません。「戸羽さん、きょうは何で来ました？」と聞かれ、新幹線で来ましたと答えると、「いやあ、グリーン車も込んでいましたね」と。何げなく、いや、私はグリーン車は、疲れた日以外は使わないんですよと言ったら、「えっ、そうなんですか」と驚かれ、逆にこちらがびっくりしました。彼らは、お金を持っています。政府とも話ができる。いざとなれば官邸に呼ばれていろいろなことするそうですが、それは果たしてボランティアなのでしょうか。駄目だと言っているわけではありません。ボランティアというくくりをもう一度考える必要があると私は思うんです。企業からお金を集めて、あるいは政府からお金をもらって活動し、さらにはそれを報酬として得ている。それは、私に言わせれば、“ボランティア屋さん”です。一方で、立教大学の学生の皆さんもそうですし、日本中の学生の皆さんも、一般の方も、仕事を休んで、自腹を切って来てくださっているではないですか。両者を同じボランティアと呼ぶことはできません。

住民の皆さん、被災者の皆さん。復興への思いはひとつといえども、意見が分かれるのは当然のことです。私も首長という立場ですから、決断をしなければいけない場面がたくさんあります。例えば、震災が原因で倒壊した建物などを、次世代に向けて震災が起きたという記憶や教訓のために取り壊さないで保存しておく「震災遺構」の問題があります。全壊した市役所を、広島の原爆ドームのように残したらどうだというような話でありまして、残せ、残す

なという綱引きが起こります。どこまでいっても平行線なのは分かっています。時間をかければかけるほど対立が激しくなっていくように感じましたので、私は基準を決めました。その建物で、どなたも犠牲になっていないのであれば、残す可能性はありますと。ただし、おひとりであっても、そこで犠牲となった方がおられたら、その建物については壊しましょうという方針を出させていただいております。壊したものは当然、がれきになります。国の取り決めでがれきの処理は3年間、つまり今年度内に終えなければなりません。それ以降はお金が出ないのです。その前に壊すか、残すかを決めなければならず、ほとんどの地域では「壊す」を選択してきました。お隣の宮城県の気仙沼市でも「共徳丸」という、とても大きな漁船が津波によって陸に打ち上げられ、震災の象徴となりました。そのまま残すのには2億円かかるという試算に、気仙沼市の市長は解体の決断を下しました。ところが、最近になって、国が、1自治体ひとつだけは残してもいいですよという話を出してきた。そうすると、またいろいろな議論が起こってくる。あれは残せ、いや壊すべきだと各地域で喧々囂々(けんけんがくがく)です。国の方針が定まらないために、こちらは振り回されてしようがないんです。

振り回されついでの話になってしまいますが、今、高さ 12.5mの巨大防潮堤をつくる計画があり、もう工事は一部始まっています。なぜ 12.5m という数字が出てきたかというと、陸前高田市を襲った津波は 15m くらいでした。まずその 15m というのが基準になるわけですが、国は、15m 級の津波は千年に一度ぐらいしか起こらない、それをハードで防ごうというのは無理だという基準を出しました。これはレベル2ということで、「L2」と呼ばれるようになっています。

ではレベル1、「L1」というのはどのくらいの高さかというと、もともと陸前高田を襲う可能性が高いと言われていた宮城県沖地震、あるいは過去にあったチリ地震津波とか、過去の津波のデータから拾って、100 年に1回、60 年に1回ぐらいの確率で起こるかもしれないというものを想定した防潮堤なんですね。計算上では 11.5m必要だと出ています。ですから L1、11.5m、プラス1mで 12.5mというのが国で決めた基準なんです。ところが、ここに来て、防潮堤は要らないという話がどんどん、どんどん、メディアを通じて盛り上がってきたんですね。宮城県では今、住民が反対しているにもかかわらず、知事が防潮堤工事を進めたということで議論が硬直化し、結果的には何も始まっていない状況にあります。

私自身は防潮堤は絶対に必要だと思っています。それはですね、たとえ 12.5mの防潮堤をつくっても、東日本大震災と同じ規模の地震が来れば、津波は乗り越えてくるでしょう。私たちは既にいろいろな対策を考えています。越えてきた水が人に危害を加えないように、0m地帯にある土地をかさ上げをしています。土をどんどん、どんどん盛って、人工的な高台をつくり、そこに家を建てます。なぜこんなことをするかというと、住む土地がないんです。それなら山を削って住めばいいと思うかもしれませんが、どんなに削っても、みんなが入れるスペースは確保できません。なぜならば、一番人口が密集していた市街地が住めない状況になってしまったから。ですから、私たちにはどうしても防潮堤というのは必要なんですね。そうしない限りは、もう陸前高田に住むなということになるか、あるいは、もともと住んでいた地域は全部捨てて、もっともっと高い山を目指して住むかということになるのだと思います。

冒頭申し上げたとおり、私たちは、本当に日本中、世界中の皆様方に支えていただいています。これが私たちの唯一の希望であり、そのことで普通の自治体ではできないようなことができるのではないかと思っているんです。プロフィールで紹介していただきましたが、私は 2011 年2月に市長に就任いたしました。2月6日が投票日、13 日からが私の任期でした。そして3月 11 日に東日本大震災が起こりました。自分も家を流されましたし、妻も行方不明になり、たくさんの職員も亡くなりました。陸前高田市の職員は、もともと 295 名の正職員がおりましたが、そのうち 68 名の方が犠牲になられました。臨時の方、あるいは通常の雇用でない方々も含めると 110 名を超える方々が犠牲になられている。

私は市長ですから、当然、市政に対して責任を

負っています。ただ、市長になって日も浅い私が陣頭指揮を取り、この東日本大震災の中でも被害の大きかった陸前高田市をどう復興するか、正直言って自信なんかありませんでした。自分に務まるんだろうか、大丈夫だろうか。もう、それしか考えられませんでした。私の小学校6年生と4年生の息子たちは、母親がいなくなって不安に思っている。私自身も不安でした。もう後ろ指をさされようが、石ぶつけられようが、二人の息子を連れて逃げるしかないなと思いましたよ。でも、今こうして市長をさせていただいていられるのは、これはまさに全国の皆さんからの応援のおかげであり、仲間がいたからにほかなりません。

私は中学を卒業するまで東京の町田というところで育ちました。3週間ほど前にそこで小学生と中学生に向けて講演をさせてもらったのですが、とにかく仲間づくり、友達づくりを頑張ってほしいと話しました。それは、自分にしたいこと、しなければならないことがあるけれども、それには専門的な知識や特別な資格が必要だという場合、ひとりではとてもできないし、そもそも震災直後の私にはそんな時間はありませんでした。それなら、私がしたいことをできる人と友達になろう。そして、その人たちに協力してもらうおうと思うようにしたんですね。

結果、全国にたくさんの仲間ができました。みんな、被災をしてから声をかけていただいた方々です。これをお願いしますと言えば、快く引き受けてくれる方が大勢います。そうして輪を広げていき、絆をつくっていきました。このことによって、私は希望を見出せました。この体験を子どもたちに教えてあげたいんです。立教大学にも、陸前高田で頑張っている高校生を対象とした指定校推薦枠を設けていただいています。「頑張ったら立教に行けるぞ」と言えば、希望がわいてきますよね。震災で親を亡くす悲しい体験をしていても、可能性を示してあげれば、踏ん張れるんです。だから私はいろいろな人たちとお付き合いをする中で様々なきかっけや可能性を見いだして、将来を担う子どもたちに分けてあげたいんです。それこそが本当の意味での復興なのではないかなと思います。

陸前高田市は今後、どういう形での復興を目指していくのか。試行錯誤の状態ではありますが、私がずっと言い続けてきたことがあります。それは、「ノーマライゼーションという言葉の必要のないまちをつくるということ」です。障害を持っている方も、高齢者の方も、妊婦さんも、子どもたちも分け隔てなく、みんな平等で、みんな仲間で、みんな笑顔になれる街をつくりましょうということであります。

私は 20 歳のときにアメリカに行きました。そのときに一番驚いたのは、今から 28 年くらい前の話ですが、ハンディキャップを持っている人たちの専用の駐車場が、アメリカには当たり前にあったんです。日本も今でこそ当然ありますけれど、当時は、そういう配慮はあまりなかったように思います。何よりもアメリカでは障害を持っている人たちがどんどん自分たちで街に出ます。初めは、なぜしょうがい者がこんなに多いのだろうと思いましたが、そうではなくて、自分の意思で出られる環境があり、それはごく自然のことであって、まわりの人たちも特別視しないんですね。

日本でも、『五体不満足』を書かれた乙武洋匡さんが、テレビなどのメディアに積極的に出るようになって、しょうがい者に対する理解は深まってきたように思います。でも、乙武さんが出なかったら、ああいう障害を持っている方が自分の意思で外に出ようと思っても、これはつらいですよね。アメリカに行くと、おへそから上しかないという人たちはいっぱいいます。でも、車椅子に乗って、平気でボウリングなどをしたりしていますよ。ひっくり返っても大笑いです。まわりの人たちも、別に障害を特別なことだとは思っていないんですね。仲間ですから。私の知り合いにもいろいろな障害を持っている方々がいますし、自分だって、交通事故に遭ったり、脳梗塞になったりして、いつ障害を持つようになるもしれない。みんな同じですよね。確かに、障害を持った瞬間に、ショックを受けるでしょうし、少なからず暗い気持ちにもなってしまうかもしれません。でも、そこで意気消沈してしまうのか、前に踏み出して、もう一回新しい人生を歩んでみようと考えるのか。私は今の日本の中には、そういう前向きな気持ちにさせて

くれる環境があまりにもなさ過ぎると思います。

この池袋の街を、車椅子であろうが、盲導犬を連れている人であろうが、自分の意思で自由に歩ける街に変えよう、段差も全部なくそう、これは確かに理想論かもしれません。でき上がった街をそのような形に変えていくのは、お金がかかることでもあり、実際は非常に難しいんですね。でも、陸前高田はできるかもしれません。なぜなら、ゼロからのスタートになるからです。私たちは行政ですから、道路もつくりますし、市役所も図書館も博物館もつくる。当然、全ての市民が等しく使えるような配慮はします。そして、お寿司屋さんも、お蕎麦屋さんも、本屋さんも、床屋さんも、みんなこれから街の中にできていきます。では、一般の方々に何を求めるか。こういう街にしたいんです、協力してください。間口は広く、盲導犬を連れていても嫌な顔はしないでください、どんな障害を持った方が来ても、普通に迎えてください。ひとりひとりがそういう心持ちになれるとしたら、陸前高田はまさにノーマライゼーションという言葉の必要のないまちになるだろうと思っています。これを絶対に成し遂げたいのです。

先日、国連のワルストロムさんという方を陸前高田にお招きして、復活したばかりのキャピタルホテルでシンポジウムを開催しました。テーマは、震災としょうがい者についてです。東日本大震災のときに障害をお持ちの方々がどんな行動をしたのか。何がよくて、何が足りなかったのか。今後どう備えるべきなのか。そのとき、私はワルストロムさんにお願いをしました。2015 年に仙台で国連の防災会議が開催されます。その部会、あるいはワークショップのしょうがい者、高齢者の部分については、ぜひ陸前高田で行っていただきたいと。私たちが目指すまちの姿を実現させるためにも、ぜひお力を貸してくださいというお話をしました。国連の方々も大変興味を持っていただいているようです。

もうひとつ、そのシンポジウムに共催の形で参加をしていただいていた日本のしょうがい者の団体では最大の、「日本障害フォーラム」というところがあります。その団体の方々も陸前高田市の街づくりに注目と期待をしてくださっています。彼らの言葉をそのまま借りれば、「陸前高田市のこの考え方、プロジェクトが今回成功しなければ、多分ずっと、未来永劫、日本ではそういう街はできないでしょうね」と。それぐらい私たちは期待を背負っていると感じています。

また、先ごろジョン・ルースさんに代わって新しく駐在アメリカ大使に就任されたキャロライン・ケネディさんが陸前高田市を視察に来られました。私どもは前大使のルースさんとも大変親しくさせていただいていました。ルース大使は、陸前高田、あるいは被災地で、「私たちアメリカは何ができるんだ」、「何をしたらいいんだ」というお申し出をずっとしてくださっており、「子どもたちに夢を持ってもらいたいから、アメリカを見せてあげてください」とお願いをしました。すると、「トモダチ・イニシアティブ」というプロジェクトを立ち上げ、中学生を横須賀基地に招待し、アメリカの方々の家庭にホームステイさせ、ミニアメリカを経験させてくださいました。高校生はアメリカ本土に連れていってくださいました。ルースさんには、新しい大使が来たら、ぜひ陸前高田に来るようにお伝えくださいとお願いしていたのですが、それが叶って、ケネディさんが来てくださったのです。

ケネディさんと初めてお会いしたとき、私はこの陸前高田の街づくりの話をして、協力をお願いしようかと思ったんですが、初対面でいきなりお願い事をするのも失礼だろうと私からは申し上げられませんでした。ところが、ケネディさんのほうから、「私は陸前高田の街づくりについて非常に興味を持っています。ノーマライゼーションという言葉の要らない街を目指しているんでしょう」と言ってくださいました。なぜ彼女がそういうことを言ったかというと、ケネディさんの伯母さまが、スペシャルオリンピックというものを創設された方なんだそうです。スペシャルオリンピックというのは、知的障害のある方々のオリンピックです。ご自身の身内にも知的障害を持っている方々がいらっしゃるそうで、そういう方々が人間らしく、人から白い目で見られることも、偏見を受けることもなく生活ができる、一生を過ごすことができる、笑顔になることができる街を目指すべきだというのがケネディさんのお考えでした。「それはまさに今、

陸前高田市が取り組もうとしている街づくりに合致する。だから、私としても、そしてケネディ家としても、アメリカとしても、陸前高田のまちづくりを応援します」というお言葉をくださったんですね。

最後に、これまでの皆様方のご支援に対しまして、本当に心から感謝を申し上げます。陸前高田市の復興計画は8年間。あと5年ちょっとであります。私たちが目指しているキャッチフレーズは、「世界に誇れる美しい街の創造」であります。その美しさは、確かに景観も大事でありますが、先ほどから言っているように、市民の心です。市民の心が本当に美しくて、みんなに優しくできて、みんなを笑顔にすることができる。そういう陸前高田市を何としても復興させてまいりたいと思っております。本日ここでお会いしたのもご縁でございます。いつか皆様方にも、陸前高田市においでいただきたいと思います。そのときは心からの笑顔で皆様方をお迎えできるように、これからも頑張ってまいりますので、どうか被災地のことを忘れないでください。

ご清聴をありがとうございました。（拍手）

宮崎　戸羽市長、ありがとうございました。お話を伺って、皆さん、いろいろな思いを持たれたことでしょう。ひとつだけ申し上げたいのですが、市長のお言葉の中の「孤立しない、孤立したくない」、そして「寄り添い続けていくことがが支えとなり、希望になる」ということ。私はここからたくさんのメッセージを受け取った思いでおります。「ノーマライゼーションという言葉は要らない」というのは、誰もが浮かないで、ひとりひとりが本当にありのままでいて認め合える、友達になれる、そこに本質があるのではないかなと感じました。本日戸羽市長とお会いできたことはひとつの出会いです。立教大学ボランティアセンターの基本理念は、「人と人との出会いを大切にする」ことです。これからも陸前高田市との関わりを育み、深め、希望ある未来へ共に歩む者でありたい考えております。